

Call me, call me, call me

拙サイト収録作 (SSSongs11@1923) と同テーマです。

突然心臓が高鳴りして目が覚めた。暗い。時計を確かめればやはり深夜、周りは寝静まっている。一瞬で吹き出した汗が、重力に引かれて頭皮の上を滑っていくのが分かった。何かが起こった、それは既に確定した事実だった。寝台に横たわったまま手で顔をなぞる。特に痛みも違和もない。つまり、王室に異変が起こったわけではない。手を滑らせて肩、胸、腹と確認していく。やはりどこにも、爪の先にさえ、異変は感じられない。暗殺、クーデター、世界戦争の再来。すぐに思いつくそうした危機に大英帝国が陥っているわけではないことはとりあえず確かだ。

そうであるなら、これは。自分ではない、誰かに——例えば、先日握った手をほだいた東洋のあの国に、何かが起こったのだ。どっ、どっ、と心臓は重く鳴り続ける。

——菊。

心の中で呼びかける。答えは無い。当然だ、二人の間にホットラインがあるわけではない。そう考えて、アーサーは一瞬目を閉じた。繋がっていた。

世界の中で、——この凶暴な時代の中で、二人だけ、手を繋いでいた。星空の下、紳士の嗜みである手袋を外して、指の一本一本で存在を確かめ合うように手を繋いだ。

不釣り合いだと各方面から言われたが、気にもならなかった。連れ返し、相棒だと言って周囲を牽制した。なにを有頂天になつてんだと隣国に笑われたが、今となってはそれも分かる。あの頃の自分の浮かれ具合は、少し恥ずかしく、そして、それ以上に、悲しい。きつと今の心を抱えてあの頃に戻っても、同じように浮き立ってしまいに違くない。世界でただ一つ見つけた繋がり。友人と呼べる唯一の存在。先月の同盟失効という未来が分かっている、それでも同じ高揚感をもってしまおうと分かる、それくらいに大切なものが手の中からこぼれ落ちたのが、悲しい。

——菊。

同盟関係にあったときでも、心で呼びかけて、答えが返ってくるわけではなかった。ただそんな気がしていただけだ。呼びかければ返事をしてくれる、そんな錯覚が、まるで実像のように浮かんでいただけ。

——アーサーさん。

菊はよく、呼びかける前、整えるように前髪を触った。さらりと揺れる黒髪、細められた眼、小さく上がった口角、そして落ち着いた呼び声。

——アーサーさん。

あの声が、そのまま再生できていた。呼びかければそれが返ってくると思っていたからだ。いや、分かっていた。

最後の瞬間でさえ、菊は薄く微笑んでいた。改定をせずそのまま失効の日を迎えたから、その日を意識していたのはアーサーと菊だけだった。二人、あの丘の上まで歩いた。菊の顔に浮かんでいたのは、古刹の微笑みだった。長い、そして短い付き合いで分かっている、あの表情に東洋人は全ての思いを乗せる。

——今まで、ありがとうございました。

どちらかに責があるわけではない。世界大戦とそれに伴う体制変化で、それまででさえ不要論がささやかれていた同盟の重要性が決定的に薄れた、そういうことだ。国民と世界とが不要とするものを、「国」がつかなぎ止められるわけもない。できるのは、頷くことだけだった。

こちらこそ、とその言葉を出すのが辛くて、ただ頷いた。自分こそが、たくさんのものを受け取っていた。相棒と呼べる存在をくれた。相棒のために何かをするという経験そのものを与えてくれた。有り難い、その言葉そのままに、他の誰によっても埋められなかった孤独という穴が、また空いた。

それから半月。

突然感じた拍動と、喪失感。

——菊。

呼びかけても答えが返らない——返るイメージを抱けない。目を凝らしてもあの微笑みを中空に描けない。いつものように微笑みながら佇んでいる、気がしない。

寝台を抜け出し、身支度をする。何事かと駆けつけた部下に「日本へ」だけ告げて、アーサーはドアを開けた。

戦場かと思うほどの焼け野原だった。もともと地震が多い土地柄で、だから少々のものでは動じない人々が、マグニチュード7.9という未曾有の大地震に、度を失っていた。不安が流言飛語をうみ、陰惨な事件を引き起こしてもいた。瞳孔の開いた人々は、既に何かを失った人々だった。更に失うのかもしれないと怯える人々だった。見るに耐えられず、アーサーは帽子を深くかぶり直した。

事前に連絡する余裕もなく訪ねたのは初めてだった。けれども、だからではないだろう、アーサーのおとないに菊の門は沈黙を返すだけだった。きゆうん、と小さな声がして、その門が揺らされる。足音は聞こえない。いるのか、いないのか。迷いながら門を押せば、軋みもなく開いた。隙間から顔を覗かせた菊の愛犬が足下にまどわりついてくる。

「ぼち、菊はどこだ」

訪ねても犬はきゆうんと鳴くだけだ。人の気持ちどころか言葉も分かるのではないかと思わせるこの賢い犬は、もしかしたら、そうとしか言えないのかもしれない。

まるで菊のようにぼちが先導するから、アーサーは躊躇いつつも、施錠されていなかった玄關の引き戸を開けて、中に入った。倒壊も消失も免れたらしい。せめてそのことに、アーサーはほっと息をついた。

「――菊」

呼びかけは古い家屋に吸い込まれていく。言葉が返らない。そのことがアーサーを不安にさせる。

出かけているのか。そうなのかもしれない。救助の先頭にたっているのかも。もしかしたら焼けた死体を埋める穴を掘っているのかもしれない。そのために地にシャベルを突き立てる菊の痛みを思うと胸が痛い、そうやって動いているなら、それでいい。けれど。

「――菊!」

言葉が返らない。返る気がしない。声が聞こえない。呼びかける声が聞こえない。

「――アーサーさん。」

姿が見えない。顔を思い浮かべることさえできない。

「――菊っ!」

悲鳴のようだ、頭の端で思った。いや、悲鳴だった。俺を呼べ。

名前を呼んで、助けを求めろ。

そうしてくれたら、すぐにでも手を伸ばすのに。今、ここにはいるのに。この手には、それでもまだ、力があるのに。名前を呼んでくれ。

「――菊……」

その時、そっと手に触れるものを感じた。慌てて振りかえるが、何もいない。何も見えない。この家は音もなく生氣すらない。だけど今、何かを感じた。

息すらも止めて立ち尽くしていると、やがてもう一度手の甲に触れた「なにか」が、そのまま滑り、指を絡め取って手を握った。

「きく」

ここにいるのか。確かにその細い指は、にも係わらず刀を握る胼胝のできた掌は、菊だった。答えは返らない、その像は結ばれない。多分、そのような状態なのだ。今、彼の中心部を占める帝都の人々は、「日本」という枠組みを思うことができず、シエルターを失った闇の中で震えているのだ。だから彼の声は、姿は失われてしまっている。

しかし――確かにここにいる。

強く手を引けば確かに菊である塊がアーサーの胸の中に飛び込んで来る。見えない菊の、頬を擦り、額を打ち合わせる。自分を呼ばない菊。呼べない菊。自分たちは、こんなにも脆い、不安定な存在で、だけれども、やはり、ここにいる。

「きく……」

背中に回された手を感じ、アーサーは天を仰いで眼を閉じた。

これが、菊の呼び声。助けて、ではない。もう同盟国ではない、ワシントン体制の中に組み込まれた一国同士ではない、だから哀訴などできない、けれども。

「――アーサーさん。」

ここにいます、と、言葉でなく、表情でなく、その存在そのもので菊は囁いた。